

本当にイスラム教は怖いのか

七月一日金曜日、バングラデシユの首都ダッカで起こった襲撃事件は、明確に外国人と異教徒を標的にした。実行犯は人質一人ひとりにコーランを知っているかを尋ね、知らない人を殺害していったと聞いた。私は社会で三大宗教の一つ、イスラム教の経典として、コーランという言葉を知ったばかりだったのでショックを受けた。私だけでなく、多くのイスラム教徒、バングラデシユ人を含めた世界中の人にとっても衝撃だったに違いない。

社会の授業で宗教について勉強した時に、「イスラム教怖い。」

という声が入った。それは私自身の気持ちでもあった。

七月二十三日土曜日、東京ジャーミイのモスクに行った。私の父と母は、バングラデシユを含むアジアの国で貧しい人を支援する仕事をしている。この事件をきっかけにして日本人の間で偏見や誤解が生まれることを恐れ、「モスクへ行こう」というイベントを企画した。

モスクは代々木上原にあり、約八十年前に日本に住むイスラム教徒によって作られた。モスクのドームの壁には青を基調とした美しい模様があり、その中にチューリップも描かれていた。チューリップの生産地としてはオランダが有名だけれども、原産はイスラム文化圏のトルコである。その他にも数学や筆算なども、イスラム文化圏から多くのことが発展していることを知った。

イスラム教について説明してくれた下山茂さんは、若いころにアフリカに行った時、イスラム教を信仰する人たちに食べ物をもたらしたり、家に泊めてもらったりしたそうだ。そんなイスラム教のやさしさに触れて、下山さんはイスラム教に改宗したそうだ。この話を聞いて私はイスラム教の人はとても親切で、優しく、自分のことだけでなく、人のことも考えられる心のひろい人だと分かった。

過激派グループによるテロは、貧困を抱えた人や紛争で家族が殺された人などが起こすと一般的には思われていた。でも七月一日の事件では、そういった問題を抱えていない人が実行犯であったことが大きな特徴だ。

日本で三十年以上ベンガル語を教えてきたムンシ・アサド先生によると、

「バングラデシユでは今、仕事を得るためには学校に行って勉強することが必要で、子どもたちは良い仕事に就くために勉強ばかりの毎日を送っている。そのため外に出て友達と交流を深めたり、野外学習などの経験をしたりすることが難しくなっている。子どもたち

は好んで勉強ばかりしているわけではないので、一人で悩む子が増えている。そこに過激派グループの人が優しい言葉をかけてきて、その言葉を多くの子供たちが信じてしまう。」

親に相談することで過激派グループに入らずに済んだという男性の手記を私は読んだ。私は若い人が、親や大人たちとしっかり向き合って話すことが、自分を取り戻し、危険な行動に走らないうえで、大切だと思った。

私たちはモスクで下山さんの案内を受けて礼拝を体験した。下山さんによると、イスラム教の礼拝の時は偉い人も貧乏な人も皆横一列に並ぶ。なぜかというところ、イスラム教徒の人は誰でもどんな偉い人も皆平等だと思っているかららしい。なぜ多くの人がモスクで礼拝をするかというと、モスクで礼拝をすると、心に栄養が送られるようにでもリラックスできるのだという。そのためモスクでの礼拝が終わった後の人の顔は笑顔でキラキラに見えるそうだ。

今回話を聞いて、テロをしている人は、ごく一部の人だけで、イスラム教の人は怖いと思われているけれど本当は正反対で、おだやかで、自分の財産や食べ物の一部を貧しい人に分け与える「喜捨」という教えを多くの人が当たり前のようにやっている。また、イスラム教の人は自分の信仰を押し付けたりしないということを知った。それなのに過激派グループが事件を起こすたびに、周りから誤解されてイスラム教の人が怖いと思われていた。

私は今回の「モスクへ行こう」を通して、イスラム教は怖い宗教なのではなく、自分のことより周りを優先している人たちがたくさんいることを知った。そしてこのことを私だけでなく、イスラム教に対して偏見を抱く全ての人に知ってほしいと思った。

7月23日「モスクへ行こう」参加者 中学一年生のレポート